

特別な教育的支援を要する児童が在籍する通常学級における機会利用型社会的スキル訓練 —アスペルガー傾向の児童と周りの子どもたちとのかかわりに焦点をあてて—

Incidental Social Skills Training for the Child who Needs Special Educational Support in Regular Class : Focused on social interactions between the child with Asperger syndrome and the other children

大森 慶子 (Keiko Omori) 指導: 佐々木 和義

【問題と目的】 今日の学校現場において、いじめや問題行動、不登校などが社会問題となっており、その治療や予防を進めていくための方策が求められている (後藤・佐藤・高山, 2001)。その方策の1つとして、社会的スキル訓練 (以下, SST) が実施されてきている。これまでにSSTが実施されることの意義やその効果が論じられ、かなりの研究知見が蓄積されていることが報告されている (金山・佐藤・前田, 2004)。しかし、機会利用型SSTに関する研究はあまり見られない。

一方、2002年に実施された文部科学省の調査では、通常学級に在籍する児童生徒のうち、約6.3%が特別な教育的支援を必要とされているが、要支援児童および周りの子どもたちとのかかわりについて機会利用型SSTを実施した研究は少ない。

そこで、本研究では機会利用型SSTを実施することで学級全体および要支援児童と周りの子どもたちとの日常的なかかわりへ及ぼす般化効果 (研究1)、要支援児童の適切な行動に及ぼす効果 (研究2) を検討することを目的とする。

研究1: 学級全体への機会利用型SSTおよび要支援児童と周りの子どもたちとのかかわり

【方法】 埼玉県公立A小学校の4年生33名 (男子17名, 女子16名) の学級、および特別な教育的支援を要するアスペルガー傾向のある男児Bを調査対象として2009年10月から12月まで実施した。標的スキルは「あたたかい言葉かけ」と「積極的な聞き方」とした。学級全体に実施する機会利用型SSTは授業時間45分を1セッションとし6セッション実施した。訓練の効果を確認するために社会的スキル尺度を用いた。

その訓練がB児と周りの子どもたちとの日常的なかかわりへ及ぼす般化効果を検討するために朝の会を利用して、平均週3回ゲームを実施した。B児から周りの子どもたちへ、および周りの子どもたちからB児への適切・不適切行動をそれぞれカウントし、その回数の平均を算出した。

【結果と考察】 学級全体への機会利用型SSTについては1要因分散分析の結果、「あたたかい言葉かけ」は有意差が認められなかった ($F(2, 60)=0.70, n.s.$)。「積極的な聞き方」も有意差は認められなかった ($F(2, 60)=0.38, n.s.$)。これは、標的スキルの選定が課題であったと思われる。し

かし、感想からは、機会利用型SSTを体験したことは児童にとって大変意義のあることであったことがうかがえる。

B児と周りの子どもたちとのかかわりについては、B児から周りの子どもたちへの適切なかかわりは減少し、訓練の効果が確認されなかった。しかし、不適切行動は訓練後に減少し、フォローアップ期にも維持されていた。周りの子どもたちからB児への適切行動は増加し、不適切行動は減少した。これらの結果から、学級全体に機会利用型SSTを実施したことで、特に周りの子どもたちからB児への適切な行動へ及ぼす効果が認められたことが示唆される。

研究2: 要支援児童への機会利用型SST

【方法】 研究1で対象としたB児に対し、標的スキルを「授業遂行行動」として、授業時間45分を1セッションとし1日平均2回実施した。訓練の効果を検証するため、単一事例計画法のABABデザインを実施した。

【結果と考察】 国語と算数の授業場面におけるB児の適切な授業遂行行動の生起率の推移をFigureに示した。

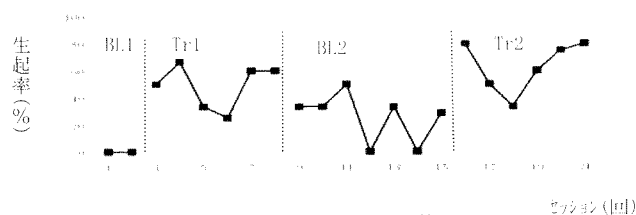


Figure 適切な授業遂行行動の生起率(国語・算数)

この結果から機会利用型SSTを実施することによって、要支援児童への適切な授業遂行行動の生起率が増加したと考えられる。

【総合考察】 学級全体への機会利用型SSTと並行して、要支援児童を対象に個別にSSTを実施したことは、今後の指導法の開発という点において意義があると考えられる。また、その訓練が周りの子どもたちから要支援児童への適切な行動へ及ぼす効果および要支援児童の適切な授業遂行行動へ及ぼす効果が認められたことが示唆された。